形をとつている。地下水は地質構造の関係から、東方にゆるく傾斜している。その上台地上は流入河川がなく農業は畑作が主となつている。

2.各地形面と土地利用との関係における特徴．地形分類を大ざつぱにみた場合には地形面と土地利用との関係は非常に明瞭である。即ち丘陵では林地が圧倒的に多くを占め．山麓緩斜面では畑地と集落が卓越している。台地では畑地が3分の2を占め，平地林が幾分残つているために林地が5～6分の1ほどあり集落は少い．河岸段丘上では畑地が16%～40%を占め．次に集落が多くなつている。河岸段丘は多摩川の両岸に数段あるがその高さや又南岸にあるか北岸にあるかによつても土地利用にはその特徴が認められる。

以上がこの地域の地誌学的考察の結果であるが，この他に関東ロームについて少し調べてみた，この地域の台地は立川面と連続する面であるから立川ロームが被覆しているのが当然と考えられるのであるが、青梅付近でロームが被覆していない地点があるということを式先生が教えて下さつた。そこでこの付近一帯にはロームはないのかもしれないという想定の下にロームを求めてフィールドを歩き出した。ところが1.5mのボーリングの結果は台地上の畑にも又その北方は、加治丘陵までロームは認められたのである。即ちボーリングや露頭観察．下水工事その他の工事等によつて地下の状態が幾らかでもみられるところでの観察などの結果から次のようなことが判つた。

①台地（立川面）のロームは北に厚く南に薄失する。

②その厚さは最厚2m程度であろう。

③ロームは立川面の大部分に分布しているが台地の西～南縁部の一段低い部分には全く存在していない。

次にこれらの原因を考えた。この地域一帯にロームがうすいのは、火山灰起源の火山からの距離が遠く、その間に存在する山地によつて、火山灰が運ばれてくる量が減少する為であろう。又、南方に薄失するのは、この地域の南にある大河西丘陵が火山灰降下の障害となつていること及び台地の一段ひくい部分にロームがないのはもつと局部的な原因によるものであろう。

金川扇状地における自然地理学的考察及び果樹園化について

金　子　晶　子

1．研究の目的

従来扇状地は平野の一部として考えられ、その研究も平野研究の一端としての位置にあり．扇状地の平面的状態を論ずる地形学的研究であつた。しか

し、近年、平野の研究の進展につれ、扇状地研究も次第に地形面、堆積機構の考察に迄及ぶようになってきた。

このような研究段階にある扇状地、ここでは甲府盆地東南部の金川扇状地をフィールドとして、自然及び人文、両者の相互的関係から地域性の把握に努めた。即ち、自然の面では地形分析を中心に、これに土壌、地質を組み合わせ金川扇状地の形成を考察することを目的に、又人文の面ではこの自然環境の上に展開する人間生活の基本である農業、特にこの地域を特色ずける果樹園化の問題をとり上げ、この考察を目的とした。

2.フィールド

調査地域である金川扇状地は御坂山脈東北麓の断層崖下に発達した御坂扇状地群中の1扇状地であり、御勅使川扇状地に次ぐ規模をもっている。

気温較差が大きく、非常に寡雨な内陸性盆地の気候、及び扇状地性の水はけのよい土壌という自然環境に加えて、古くからの果樹地域である勝沼に隣り合う位置、更に山がちなために生ずる集落的多角的な零細経営、かつ商品化農業への傾向をもつ本県農業の特色の下に、この地域は近年の全国的果樹園化の動きの中にあるのである。

3.自然地理学的考察

まず扇状地の傾斜測定、縦断及び横断面図の図工作業から、金川扇状地を地形学的にみると、傾斜は扇頂、扇端よりむしろ扇央部に大きく、又扇状地の形態は西北へと傾き、左岸の方が扇状地脚が長く、従って堆積の capacity も大きいことを示している。

次に4万の空中写真に34点の土壌断面と加味して地形分析を行うと次図の通りであり、次の様な9地形面に分析した。

1山麓緩斜　2扇状地Ⅰ面　3扇状地Ⅱ面　4扇状地Ⅲ面　5河岸段丘面
6旧河道面　7すそ合い谷面　8笛吹川低地面　9河原

中でも問題となるのは、形成時代に注目して、fan proper の面を更に細別した扇状地3面の内、当扇状地の主体をなす扇状地Ⅱ面及びこのⅡ面内に扇央部を要として作られた扇状地Ⅲ面である。即ち、扇状地Ⅱ面は、少くとも厚さ1mの礫を混ずる茶褐色土壌におおわれているのに対し、扇状地Ⅲ面では茶褐色土壌は全くみられず、厚さ40～80cmの humus でおおわれ、両者の間には大きな形成時期のずれが考えられる。当扇状地では関東ローム層の様な明白な洪積世の地形学的規定となる層がみられないので実証することはできないが、その形成時期を、扇状地Ⅲ面は関東地方におけるローム層を欠除する humus のみの沖積段丘に対応するものとして沖積世に、

また扇状地Ⅱ面はhumusを欠き茶褐色土壌で特色ずけられる事から、一時代形成の古い洪積世と考えた、次に扇状地の形成を考えると、扇状地Ⅲ面はⅡ面を侵蝕しつつ、同時に堆積の営力も働いて作られたと考えられ、これは扇状地Ⅰ面に対するⅡ面の関係についても同じと考えられる。更に扇状地Ⅲ面は、その形成に当り、合流の形態はとらず既成の扇状地内にそれを作ったと同一河川によって形成された一種の復合扇状地の形態をとっていると考えられる。その上扇央部の急傾斜、傾斜の転換点及び湧泉の存在から、扇状地Ⅱ面をおおう小扇状地も推測され、従来の扇状地研究において教科書的と考えられてきた金川扇状地も、形成時代に主眼をおくと、このように異った形成時期の数面から構成されており、今後の扇状地形成を考えていくに当って注目すべきだと思う。

4.果樹園化について

近年果樹園化は全国的な傾向であるが、特に金川扇状地は山梨県内での新興果樹地域、東八代郡の中でも更に新興地域として位置している。即ち、東八代郡は結果に3～4年を要する桃はもちろん、4－6年のぶどうも未成園面積においては県下オ1、果樹園面積の増加率も最高を示し、勝沼を中心とする果樹専業地域に対し新興果樹地域となっており、この郡における傾向は、金川扇状地においては一層顕著で、勝沼に続く辺縁地域としての他位にあり、現在果樹園への転換が最も進んでいる新興地域なのである。

果樹園化の現象は、この地域においては勝沼とKern Gebietとして、西南へと進展していく方向性をもち、金川扇状地はその途上にあるので、同様に果樹園化は東北部の一宮村に最も進み、西南の錦生、美村へと低くなり、絹養蚕地域の曽根丘陵に続くのである。ここで当地域における果樹園化を農家経営の面から考えると、右岸の一宮村、殊に禾木、一の宮部落では果樹専業へと進み、これに対し、左岸錦生村では養蚕、ひいては米作も現金収入源にあてる複雑な農家経営を呈しつつ、漸次果樹専業化に向かう過渡期の状況を示している。このように農家経営に迄ほり下げると、一層明確化してくる果樹園化の方向性は、当地域の果樹園化が東京を市場として発展してきたという特殊性から生じてきたものであり、ここに東扇状地の果樹園化を考えるに当っては東京との距離、云いかえれば国道20号線との結びつきが重要な意義をもってくると思われる。このような因子と考慮して始めて金川を挟んでの著しい果樹園化の相違、果樹と養蚕との競合関係、更に果樹内でのぶどうと桃の競合関係等が解されると思われる。

以上、果樹に好的な自然環境をbaseに、これに相互的関係をもって働ら

いた人文的要因の相違によって、金崩状地の果樹園化は諸タイプを示し、ここに各々の地域性が生じてくると思われる。しかし大きな目でみれば、金崩状地は自給的未作をもとにした零細商品農業地域と云えるであらう。

卒論を書き終えて

（三浦半島南帯北部の地形と土地利用）

川喜田 光子

三年も終りに近い頃「卒論に関する話があるから集合するように」との伝達があって、ぞろぞろと先生のお部屋に集ってはみたものの〝卒業論文〟などという言葉は何か空恐ろしい響きをもつばかりで、自分のことだという実感とはまるで程遠いものであつた。

「東京付近の一地域を選んでその地誌を作る。」というのが今年の卒論の組いであつたが、さあ何処が良いだろう？此処でもない、彼処でもないと思案しつつ決定をみないままに、周囲では次々と地域の選択が進んで行く模様。とうとう、交通便利で現地調査が容易なこと、軍の要塞地であつた為に今迄比較的等閑に付されていたことなどを表面の理由として、本当のところは、夏は海水浴場、冬は避寒地として京浜の人々に親しまれている当地の暮し易さに目をつけて三浦半島を選ぶことにした。

「三浦半島に決めました」なんて公表してはみたものの、当地に関する知識ときたら、浦賀水道を隔てて房総半島に対峙し、西には相模灘、更に伊豆半島を控えているという事をしっている位で全くお話にならなかつた。

本来ならば、地域決定と同時に調査に着手しなければならない筈であるが、何や彼や取紛れ、かてて加えて生来の怠慢もあって、光陰矢の如し、何時の間にやら月日は過ぎ去つてしまい、教職の観察期間、実習期間とめまぐるしい日々の続くうちに学生々活最後の夏休み、その間北海道に遊び、そんなこんなで九月に登校した時には、四月以来何等の進歩もみていないことをしって流石に聊か呆然とした次第であつた。

六月及び七月に合せて数日現地調査に赴いたけれども、予備知識の全くない儘で現地を歩いても、観察の主眼がはつきりしないためにたいした成果はあげられないことを実感したに止まった。

九月に入り、そろそろ調査結果の整理などにとりかからねばならない頃になって、おくれに気が付いた時には、しなければならない事が多過ぎて全くどうなることかと戸惑ってしまったが、そうそう呑気に構えてもいられないので、まず文献によって地域の既況を把むべく〝三浦半島〟という四字を求